
天星の地

矢野 新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天星の地

【Nコード】

N6867B

【作者名】

矢野 新

【あらすじ】

「お迎えに参りました。我が新天」普通の女子高生、愛の前に現れたのは異世界の生き物と自分を迎えに来たと言う謎の人物。果たしてこの人物は誰なのか。新天とは？

第一話・愛

愛はすっかり暗くなった夜道を足早に進んでいた。

日の長さが変わってしまったからというもの、愛にとってこの道が一番嫌いになっていた。

(早く帰ろう…)

駅から家までは歩いて約15分。それでも愛は背中を丸めるようにして歩いていた。

「ミツケタ……」

不意にそんな音が聞こえ、思わず愛は振り返ってしまった。

(え…?)

(な、何あれ…?)

そこに居たのは愛が今まで見た事も無いものだった。空に浮いており、この世の物とは思えない姿をしていた。

(ば…化け物!!)

愛は背を向け走り出した。化け物が追い掛けてくる。

「な…何で追い掛けてくるの!？」

化け物は重さを感じさせない動きであつという間に愛に追い付いた。そして、愛の背中 of 長さ程あるつかという爪を伸ばしてきながらズツとするような声をあげた。

(っ!…)

愛は堪らず耳を塞いだ。

第二話・愛

「切咲！」

《了解》

そう叫び声が聞こえ、何か切れる鈍い音がした。化け物の断末魔が聞こえた時、愛は目を開けた。

「？」

愛はその光景を見て目を見開かせた。

（な 何あれ…？ 人！？）

そこには人間と、その横には空に浮かんでいる何か光る物が居た。地面に転がっているさつきまで愛を追い掛けていた化け物が、宙に霧となつて消えていくのを見ている。

「あんたが天王？」

「えっ…？」

愛に近付きながら愛を助けた（？）人物はそう言った。すると、膝を折り愛の前に頭を垂れた。

「お迎えに参りました。我が新天」

その愛を助けてくれた人物はコウ鵠と名乗り、愛は天国テングニの次期王だと言うのだ。

「ま…待つてよ。私天国という所がある事自体知らなかったのに」

「それはさっきの降魔達のような奴らにばれないようにする為、何も言わないよう口止めされていたんだ」「じゃあ何故私はここに居るの？」

「それは」

《主、降魔の気配が》

鵠が何か言おうとした時、さっきの光る奴が突然空に現れてそう言った。

「切咲お前は王を護れ。羽帯」

《ここに》

今度はさっきと別のが現れ鵠と一緒に行ってしまった。

「…な、何？」

《王、あなたがここから動くのは危険です》

危険！？

ただならぬ気配に思わず愛の声が大きくなる。

「どうしてよ？私はどこ行こうと勝手でしょ」

《王がここを動けば結呪が破られあいつらが押し寄せてきます》

第三話・愛

「キ…ザキだっけ。あなたはコウを助けに行かなくてもいいの？」
《我はあなた様を護れと主に仰せ遣ったので》

淡々と切咲がそう言う。愛は切咲を見上げる。

馬のような頭に鹿のような体。足の付け根辺りから毛のような物が立ち上っていた。

（そんなのが私を護ると？）

愛は目眩を感じ、額を押さえた。

（これは夢？）

今さらながらにそんな台詞が頭に浮かんだ。

「まずいな」

状況を一目見ると鵠はそう呟いた。

読みはあたっていた。降魔達が愛の家へと向かっていた。

「羽帯」

《了解》

羽帯が一声上げると、愛の家一帯に带状の薄い壁が現れた。

「印」

鵠がそう呪を唱えると羽帯が結んだ結界が一瞬光った。降魔達は結界に阻まれ、それ以上愛の家へは近づけなくなった。

「羽帯、切咲の所へ行け」

《王の認知が得られなければ…》

「構わない。それよりもこの世界にこれ以上被害が出るのを防ぐ」

《承知》

羽帯がその場から姿を消す。鵠が組んでいた印を一度解し、呪を結んだ。

「継…！」

気が付くと雲の中を飛んでいた。辺りの景色が後ろに飛んで行く。

(…？ 私空飛んでる！？)

必死にしがみついていた背中切味のだった。

「切咲…どこに行くの？」

しかし、切咲は何も答えない。

(もしかしてこれって…誘拐！？)

「ちよつと！降ろしなさいよ！！」

愛が暴れる。

《王、しっかりつかまって下さい。落ちます》

「何を」

その叫び声は途中で途切れた。愛は手を滑らせて切咲の背中から落ちてしまったのだ。

第四話・愛

(えっ私落ちてる！？ちょっとコレ本当！？落ちてるじゃない…！)

気が付いた瞬間愛は混乱し、地面に衝突する瞬間を思い浮かべてしまった。

(いやー！切咲ー！！)

何だか早く落ちるような、ゆっくりと落ちていくような不思議な感じに囚われた。風が上へと吹かれて行く。愛は強く目をつむった。と、落下が止まった。

(…！！！？)

愛が恐る恐る目を開くと、辺り一面不思議な霧に包まれていた。

(オレンジ色の霧…？)

訳が分からないまま辺りを見回していると、霧に影が映った。

「だ、誰？」

段々近付いてくると、影は何かの動物のような形になった。

「切咲…？」

しかし、霧の中から現れたのはさっきまで必死に背中にしがみついていた物ではなかった。

(何…)

それは銀を帯びた青色の、現世には存在しない姿だった。

何だか儂くて綺麗だった。けどどこか悲しげに見えた。

「切咲の仲間…？」するとその青い獣は愛の前に頭を垂れた。

(えっ…)

愛が動揺して動けないでいると、獣は愛の目を見据えた。尊厳と願望のような眼差しで…

「まさか…… 鵠…なの？」

なぜかそう思った。

獣は首を戻すと愛に背を向けた。

「待つて鵠！」

しかし鵠は一度も振り返らなかった。

(どうして…あなたが私を連れて来たのに…)

と、いきなり霧が晴れ辺りが暗い夜の森へと変わった。

「……とりあえず切咲を探さないと」

愛は暗い森へと、足を踏み入れた。

第五話・依

愛はしばらく森を歩いていたが、とうとう座り込んでしまった。

「もうだめ、歩けない」

（大体ここどこなのよ？）

今にもその暗い茂みから、何か飛び出してきそうだがサツ。

叢が動き愛はビクツ、となった。

叢から飛び出して来たのは、小さな鼠のような生き物だった。愛を見て驚いたように逃げて行った。

（びっくりした…）

愛がほつと、ひと息付いた瞬間

《王！こちらにいらしたのですね》

「ギヤアー！」

暗がりから突然、その声を掛けられ愛は思わず頭を抱え込んだ。

「来ないで！神様仏様…」

《…王》

恐る恐る愛が顔を上げると、そこに切咲が立っていた。

「あんたどこ行ってたのよ！おかげでこっちは死ぬ程怖かったんだからね」

《お側を離れてしまい、申し訳ありません》

そこで、愛は切咲が脚を庇うようにして立っている事に気が付いた。

「脚、どうかしたの？」

《何でもありません》

切咲は脇腹から血を流していた。

「あんた怪我してるじゃない！」

愛は思わず切咲に駆け寄り怪我に手を伸ばしかけ、制服の袖を破り切咲の血を拭った。

《たいした事はありません、王。それよりも御身のお身体が汚れて

しまいます》

「馬鹿ねー血流してるあんたを、見て見ぬ振りなんて出来る訳無いでしょ」

《王…》

愛は血が止まって来たのを確かめると、辺りを見回した。

《どうかなされたのですか》

「何か消毒とかしたいなと思ったけど、何か無いかなと思って。血も止めないと」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6867b/>

天星の地

2010年11月17日03時09分発行